芸振

大分県芸術文化振興会議会報

発行人・挾間正年　　編集人・原尻　実

No.56　57・10

もくじ

小説こぼれ話―小郷穆子……1
特集―美しい大分―日舞……2
特集―美しい大分―洋舞……3
特集―美しい大分―民踊・民族舞踊……4
提言―木村成敏・第18回県芸術祭開幕……5
県内の文化施設―竹田文化会館……6
市町村文化活動―日田文化連絡会……7
大分県演劇のあゆみ(5)・文化ニュース……8

小説こぼれ話

栄光園乳児院長
九州文学・詩と真実同人
小　郷　穆　子

第15回九州文学賞をちょうだいした。受賞が決定した日に、小倉の劉寒吉先生からお手紙をちょうだいした。

「九州文学賞は『ガラスの階段』に決まりました。おめでとう。3年間、尻を叩いた甲斐がありました……（以下略）」

宛名は「きりしたんお穆どの」である。

受賞作は私一人の力で成ったのではない。60枚ほど書いて、首藤三郎氏と狭間久氏に泣きつき、生原稿を読んで貰い、指摘された助言をことごとく取り入れて、やっと145枚書いたものである。題名は最初「落ちこぼれ症候群」としていたのを、劉先生が「何じゃ。そりゃ。もちっと考えんか」とおっしゃったので、2日ほど宙に眼を据える思いでひねくり出した。

このような師匠、友人を持つ身の幸せを痛感している。駑馬はひっぱたかれないと動かない。私の小説書きはすべて睡眠時間を削った深夜作業だから、ヨダキイ時も多いわけで、さぼっていると、すぐ劉先生から電話がかかってくる。駑馬はびっくり飛び上がり再び書き続けるということになる。

私の願いは、私の小説を小説として読んでほしいということだ。小説と事実を混同する読み手が多いから困ってしまう。ちゃんとした読み手は、一つの作品として読む。だが世の中には週刊誌のルポのように思う人が案外多い。

以前、九州沖縄芸術祭文学賞を受賞した時、小説の主人公のモデルをなさった娘さんを、うちの息子の嫁に貰いたいと言って、わざわざ高知からやって来た奥さんがいる。息子さんの写真や履歴書、家の血統書みたいなものまで持参されている。あれは小説で私の作り出した娘で実在しないと言っても、なかなか納得しない。その真剣な表情を見ると笑いとばす訳にもいかず、本当に困ってしまった。

私はルポ・ライターではないから、現実への批判をナマの形ではやらないし、下敷きにするような事件があったり、人物がいたとしても、そのままの形では使わない。私の設定した構成の中において、私の与えた性格を持って動いて貰う。

今回の受賞作の主人公は少年だが、ひょっとしたらあの子じゃないか？　などと詮索されると嫌だなあと思っているところだ。

小説を書くのは辛い作業だ。しかし書かないでいると情緒不安定になるから、同じ辛いのなら書く方がましだとしみじみ思っている。

「故郷」小野一郎（新興美術院）

特集 ― 美しい大分 ― 舞踊をとおして……

豊かなる「ふるさと」づくりに……

<日舞> 花柳笹之丞

昭和57年の県日舞連盟の活動は、昨年に比べ表面立つて特筆するような事柄が総括的に見て割合いに少なかったが５月には大分合同新聞社の主催である吉例の大分合同名流会に91余名の者が参加出演し、古典舞踊独特の優雅さと熱気溢れる舞台が繰り広げられた。

また、10月初旬においては第18回大分県芸術祭の開幕行事として大分県民演劇・豊後みゅーじかる「炭焼長者、臼杵石仏物語」公演に当連盟より、花柳裕久英、花柳昌吉郎、花柳笹之丞、花柳津代志、花柳笹良志、藤間茂喜の６名が参加共演して地方文化の創造と発展に役立たせて頂き誠に意義深いものがありました。

その他、県下各地では、個々の団体で意欲的に日舞の研究が盛んに行われ、その成果の発表会が自主的に間断なく開催され、文字通り地方時代の現象を呈して来たように思われます。

今後は、日本民族の伝統芸能である日舞の研鑽普及につとめていくことはもとより、大分県芸術文化の発展にまた、豊かな「ふるさと」づくりに、舞踊技術を生かして、精進して行きたいと思っておりますので、関係各位の暖かいご支援と、ご協力をお願い申上げます。

（県日本舞踊連盟代表）

舞踊あれこれ

＜まい＞と＜おどり＞

日本では昔から舞踊をあらわすのに〝まい〟（舞）と〝おどり〟（踊）の二つの言葉がつかわれてきた。この二つの言葉が結びつけられて＜舞踊＞と呼ばれるようになったのは明治以後である。〝まい〟は、もともとまわると同じ意味につかわれ、主として水平的な旋回運動のことであった。これに対して〝おどり〟は上下運動を意味することばで、形式としてはこのようなちがいがあった。したがって〝まい〟は静かで、技巧的で貴族的、儀式的な面が強いのに対して〝おどり〟は躍動的なもので、技巧を強調するものでなく、自然の原始的な動作を中心にした庶民的な面が強かったのである。

＜舞＞の精神は舞楽、能楽を形成しているが、＜踊＞の生き生きした生命力は歌舞伎舞踊にうけつがれている。

古代から中世までの舞踊の歴史は、＜舞＞の完成の歴史、＜まい＞の舞踊史であり、近世からの歌舞伎舞踊史は＜おどり＞の舞踊史ということができよう。

古典バレエ・モダンバレエ・モダンダンス

古典バレエは（舞踊劇）と呼ばれているように劇的な形をもっているが、物語の筋を踊りだけで表現するのではない。何も表現していない踊りの部分とパントマイムの部分があって、物語の筋を運ぶのはパントマイムの部分である。踊りの部分は全体の筋とは関係のない美しいポーズと動きでなりたっている。ソリストを中心とした高度な技巧が古典バレエの最大の見せ場になっている。

一方モダンバレエはこのパントマイムと踊りを区別しないで、踊りのなかに筋の運びや、感情を盛りこんで、表現しようとする。この点では、モダンダンスと同じく表現舞踊である。モダンバレエとモダンダンスのおおよそのちがいは、モダンダンスは、古典バレエの技巧・衣装・トウシューズなど、すべての要素を否定して、その上に〝表現舞踊〟をつくりあげたのであるが、モダンバレエは古典バレエの技巧その他の要素を否定せず、その基礎の上にたって、〝表現〟をこころみたのである。しかし、こんにちではモダンバレエとモダンダンスの区別はあまりはっきりしなくなってきている。

特集 ― 美しい大分 ― 舞踊をとおして……

明日の洋舞（バレエ）にむけて

〈洋舞〉樋口愁枯

今年も亦芸術の秋が巡ってきました。

大分県にとって、芸術文化振興会が結成され、すでに18年目を迎え、この間数多くの文化の振興事業が、企画開催されたことは、県立芸術会館の設立と共に、私達洋舞踊協会にとっては、とりわけ有難いことでした。

大分県洋舞踊協会の年輪も、本年で21年目を迎えることができました。創立当時のメンバーも数名は現役として舞踊の勉強に励んでいます。

現在協会員18名、他県に比べて、その数の上では決して多い方ではありませんが、一歩一歩と各自研究所の歴史を築きながらも堅実な舞踊の研修と指導に取り組んでいる姿は、実に頼母しい限りです。

各主宰者は、それぞれ年１回以上の研修発表の会を開き、その真価を評価していただいて参りました。本年も既に笠木啓子バレエ研究所（大分市）が創立20周年記念大公演（眠れる森の美女）を成功させました。続いて国際交流のため訪中の後藤智江モダンダンス（大分市）が世界水準のレベルでの作品発表。八月には平瀬克美氏の主宰する「ゆりかご舞踊研究所」（大分市）が、子供のための舞踊のあり方について斬新な新指向として一石を投じました。

平戸への舞踊取材の時

湯原恭子バレエ研究所（別府市）のクラシックバレエの発表に続いて、荒武久美子バレエ研究所（大分市）の「コッペリヤ」の発表。九月に入り、黒佐亜子リズム教室（別府市）の発表は、モダンダンスとジャズのデュエットに挑戦する意欲的な野心作、また竹田市では杉原昌子バレエ研究所が30年の地道な地方舞踊文化の灯を掲げて頑張っています。

とりわけ本年は、芸術祭開幕「ぶんごみゅーじかる」の中で披露されるバレエの踊りの指導を、佐藤朱音バレエ研究所（大分市）が担当、同列のステージの上で、歌と日舞と洋舞とを、どのようにミックスし共鳴させるかに新しい分野の開拓は、その成果がいま熱い視線を集めています。

更に11月には、県洋舞踊協会の合同公演が日田市に場を移して開催されることになっています。

協会はいま、明日の舞踊の在り方について、クラシックとモダンがそれぞれの原点と伝統を受継ぎながら、新しいものへの模索が真剣に続けられています。そして、更にジャズダンスやロックを始め、日舞や能や民踊の日本古来のジャンルにむけて、その音や素朴さの中に接点を探りつつ、舞踊のあり方を求めています。

稿を終わり、ふと想を新にしたことは、故長野正氏（大分合同新聞社前社長）が協会に托された、一県一舞にふさわしい新「おおいたの踊り」を是非と、所望された言葉であります。私はその言葉を氏の遺言として、いつの日かその振りの実現にむけて想をあたためています。

（大分県洋舞踊協会会長）

特集 ― 美しい大分 ― 舞踊をとおして……

「振り」の素朴さが民踊のいのち

<民踊> 園　田　喜　平

民謡研究会加藤先生の研究によれば、県内の民謡は1,000曲に及ぶと言う。その中のごく一部の曲には「振り」が残り、現在まで踊り継がれている。

鶴崎踊り（大分）、山路（玖珠）、扇子踊り（津久見）等、歌曲、「振り」ともにすばらしいものである。

これ以外にも、まだ振りの付いた歌曲があったに違いない。しかし、テンポを速めた歴史のあゆみの中で、「地方」と「時間」に埋もれてしまったのであろう。

加藤先生や地方の古老の記憶をたどり、掘り起こした歌曲をもとにして、民踊のお師匠さん方に「振り」を付けてもらって発表したらどうであろうか。きっと「命」を得てよみがえる歌曲もあるに違いない。

民踊の発表会を見ていると、時々その「振り」が日舞の流れを取り入れたと思われるものが目につく。日舞の先生の「振り」であろうか。日舞の優雅さもいいが、素朴さは民踊にとって命である。

その意味から、種を外部に求める事もいいが、郷土の仲間とともに民踊の振り付けの勉強にもっと力を入れることも大切であろう。

大分国体前後の振り付けの研究は素晴らしいものがあった。それが国体会場を埋めつくした事が改めて想い起こされる。

（県民踊連盟副会長　芸振理事）

庶民の中に息づいている民族舞踊

<民族舞踊> 谷本一夫

大分は仏の里だけでなく、神話の里でもあり、また得がたい霊地・神秘の里で神代、大持命大分（おおきた）が、速見の湯を下樋より持ち来たりて、宿奈比古奈命を漬し浴せると病治るという我玉温泉が多くあるが、神話、文献にあるのは別府だけ（風土記）。

私の会は日本舞踊、新舞踊、民踊、詩舞、演歌、流行歌等、幅広く、指導は顧問講師、有資格者が専任している。古典の舞技はなかなかむつかしく、古来唄いつがれている民謡舞踊は文献がとぼしい。一例に、玖珠町に伝承されている山路踊りは豊岡の御旅所で踊り伝えられる物語。盤若姫は実在していて、都に行く途中広島の小畑瀬戸（オーハタ）で遭難し辞世を嘆く。小畑の突端、高座山頂に盤若姫を祭る神峯山盤若寺が現存している。墓は五輪の塔で、用明天皇と盤若姫の塔はやや小さめに並んで、今日も大木の下にある。友人の詩吟の先生、河野氏が広島に行く時、頼んで確認してもらったが、以後、河野氏は懐古盤若姫を吟ずる時、聞くたびごとに深みを増している。また、私の会員にもくわしく伝えたため、踊りがすっかりよくなった。

民踊は多種多様あるが、庶民の生活の中から生まれ、受けつがれていて発祥の土地に今も息づいている。

民謡舞踊家はその土地にあって、他にはないと、島田豊年師から教えられた。民踊が盛んになった草分けは昭和32年、三浦直政氏を会長に民踊は唄、鳴物、踊りと三拍子揃った宮田こう先生を指導者として別府民謡舞踊愛好会が生まれ、またたく間に市内で200、県内で600と広がっていった。中山義夫先生から芳幸の名をいただき本格的になり会員の中には個人的に島田先生の名取りもでき、昭和34年11月、中山芳幸第１回民踊九州大会、昭和35年全国大会に行き、全国に大分の民踊を宣伝することができた。

昭和38年を期に会は次第に分散していったが、芳幸先生の意を私が代行して役員会にはかり、名取りのみで中山会を作り、その中に芳幸会も含めた。この承諾を得て出来た中山会は今日まで守り通してきたし、私が25年以降つくった「みす寿会」も中山会と共に栄えているのも、皆様の温かいご支援のたまものと感謝しています。

（みす寿民族舞踊研究会代表）

提言

公共の壁面を絵で飾ろう

芸振理事
木　村　成　敏

毎月よどみなく芸術会館や市内の画廊を使用して個展やグループ展がひらかれています。

絵を描く人はこの十年来毎月といっていいほどふえつづけています。

名作・迷作・努力作が何点となく描かれ、会場の壁を飾ります。

0号の小品から100号、200号の大作まで、県下で年間何千点という作品がつくられている筈です。

モチーフを探し、構想をあたため、何日間か何十日間かかかって一点の作品が出来るのです。そして、期日の間、展覧会場を飾り、何1人かの人の話題になってチョン……というのが絵画創作活動の実態ではないでしょうか。

創る側の人にとってはそれはそれなりに、一定の成果としてその人の人生に位置づけられると思います。

また、たまたまその作品を観た人にとっても何かの触発をうけることでしょう。

しかし展覧会の最終日100号の大作が会場のすみに重ねてたてかけられているのを見ると、この作品は今から一体どこにどうやって生涯を送るのであろうかと一まつの空しさを感ずるのは私だけではないでしょう。

私はいつも思うのです。こうした努力の結晶である作品がもっと沢山の人々の眼にふれて作る側と観る側との触発の場を提供出来ないものだろうかと。

こうした立場から、私の周辺をながめると、触発の場は、沢山あると思うのです。

県下には何百という金融機関の壁、公民館や市民会館の壁、大会社の会議室の壁ｅｔｃ

これらの壁を一定期間、県下の作家、愛好家の作品のために提供されたらどうでしょうか。

実施する段階でいろいろの問題があっても、やる気さえあれば、話し合いで解決出来るのではないだろうかと思います。

作品の展示にかかる費用は運搬に要する経費ぐらいのもの、それくらいは地方自治体などに持っていただいたらどうかと思います。

また、最近新築される公共的建物は、全く合理化されて「あそびの壁」が殆どありませんが、絵を飾るということがどれだけ人間の心をなごませるかということを考えて、設計段階で義務づけるような指導をされたらと思います。メキシコでの大学や公共施設での壁画、日本家屋でのふすま絵、らん間のほりものなどいいなあと思います。

「公共の壁を絵で飾りましょう」と提言します。

第18回県芸術祭開幕

―地域文化祭の質的な高まり―

第18回、県芸術祭が10月1日幕あけをした。本年は、主催、共催、参加行事合わせて106の行事が、県下各地で、11月30日まで催される。

開幕行事豊後みゅーじかる
炭焼長者臼杵石仏物語

主催は、大分県・大分県教育委員会・大分県芸術文化振興会議・大分合同新聞社の四者で、県芸術祭運営協議会が、運営の窓口になっている。主催行事は、開幕の演劇、豊後みゅーじかる「炭焼長者臼杵石仏物語」（県民演劇製作協議会）が10月1日～3日までの昼夜6回公演と、閉幕のジュニアーフェスティバル（県民オペラ協会）11月28日の昼公演（いずれも芸術会館）と2つのメイン行事をはさんで、各分野で、それぞれの催しものが予定されている。県下各地区で催される地域文化祭も、年々、文化芸術的な色合いの濃いものになってきており、県芸術祭が、回を重ねるごとに、広く県民一般の芸術文化への啓蒙の役割を果たしていることがうかがわれる。このことは、ふるさと祭的なものから、芸能発表会的なものに変わり、さらに芸術文化祭と銘うたれた数多くの行事名称からも察することができよう。土着の地域文化が、質的なレベルアップをみせてきている。

県内の文化施設

(4) 竹田文化会館

1 はじめに

山紫水明の地竹田市は、商業中心の市街地とその外に広がる農村部からなり、周囲を祖母、久住、阿蘇の連山に囲まれた、九州の小京都といわれる城下町です。

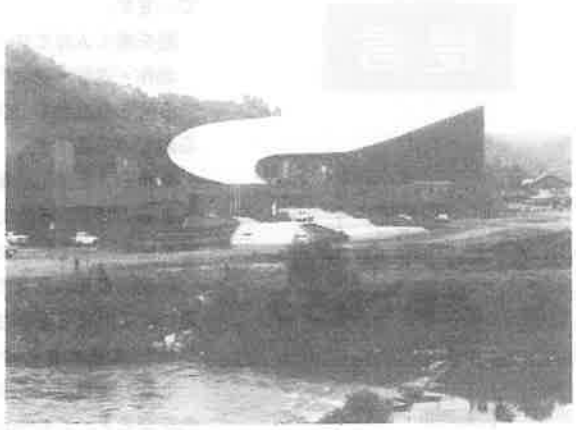
画聖田能村竹田や天才音楽家滝廉太郎などを輩出した文化の香る町でもあります。現在人口は2万3千人で田園文化都市を目指して、まち造りが行われています。

この地に、永い間の念願でありました文化会館が開館したのが昭和51年7月です。市の主要行事のひとつであります滝廉太郎記念音楽祭を毎年秋に開催している関係上文化会館が欲しいという声は昭和30年代からありましたが、具体的に建設に動き出したのは昭和46年からです。

昭和48年に入り建物の設計、建設場所、予算の見込も決まりいよいよ着工という段になってオイルショックによる物価高騰にみ舞われ、財政難により大幅な設計変更がなされ、着工したのが昭和49年12月で、3年間の継続事業で昭和51年5月に完成しました。

2 施設の概要

建設された会館は、周囲を川の流れがめぐる恐竜の首のような形をした所、玉来の阿蔵地区で敷地面積2,915.31平方メートル、建物は鉄骨、鉄筋コンクリート作り、4階建、建築面積 1,846.64平方メートル、延床面積2,987.20平方メートルで、建物の形は全国にも例のない円型です。



内部は大ホール収容人員1,003人、舞台間口15メートル、奥行11メートル、楽屋4、オーケストラピット、照明調光室、音響調整室、映写室、投光室等がある。ホール緞帳は田能村竹田作の「暗香疎影図」を模して作られている。小ホールは、100人収容、30人収容各1、結婚式場、控室、着付室があります。ロビーは606.7平方メートルで、喫茶と展示コーナーがあり、中央には朝倉文夫作のブロンズ像「三相」があります。その他付帯設備として、冷・暖房設備、給排水衛生設備、防災、舞台照明、音響等の設備があります。

3 管理運営

文化会館は教育委員会社会教育課に属し、館長は社会教育課長兼務でほかに専任職員3名で運営しています。一般への貸館と滝廉太郎記念音楽祭、市文化連盟事務局映画友の会の事務を行い、自主文化事業として年に2～3回公演を行っています。結婚式も年に50～60組行っています。

(竹田文化会館次長　堀清士)

能楽(のうがく)

子によって〈能(能楽)〉として大成された。

平安末期、地方の武士が勢力を持ち、伝染病が流行し、戦乱がおこり、乱世の状態が約六〇〇年間も続いた。この乱世の中に生まれ、乱世の中で育ち、大成されたのが能楽である。神や精霊や英雄などの物語を、太鼓、小鼓、笛などの楽器に合わせシテという主人公を中心に仮面をもちいて謡い舞う舞台芸術である。

歌舞伎(かぶき)

出雲大社の巫女が京都に出て念仏踊を〈かぶき踊り〉といって興業した。これが今日の歌舞伎の起源である。

その後〈女歌舞伎〉や〈若衆歌舞伎〉が起こったが風紀をみだすという理由で禁止になった。ここに女形が生まれたわけである。はじめは女性の代用であったが、現在では女性では表現できない独特の〝女形(おやま)〟の芸をつくりあげている。以後、歌舞伎はつねに劇と舞踊が結びついて上演され、劇を強く打ち出した時代や舞踊が中心となった時代などをへて現在に至っている。

市町村文化活動の現状

「市民芸能祭」を自己表現の場に

日田市文化連絡会

美術部門と芸能部門は、分割すべきだと極論する意見があります。営業がみえみえの、たんなるレッスン・プロとは同席しても創造活動の発展につながらないというのです。

確かに反論できない一面もあります。しかし、ある団体が営業的であっても、それに所属する会員の各位に発表の場を供することも、連絡会の役目だと思います。独自で発表の場を設けることができない団体だって多いのです。連絡会が主催する「市民芸能祭」で、緊張しきったオバチャン達が、踊りも謡も下手です。それでも一生懸命汗して舞台を降る時、あのニッコリした笑顔と、子供みたいにはしゃぐ様子を見れば、これはこれでよいのだと自信につながってゆきます。事実、独自で発表の場が持てない教室や団体が、生徒さんに説得され（気軽に初心者も上演できる。あたしだってあの位は出来るという意欲が先生を動かして）連絡会に入会してきています。今年は四日間の日程を組みました。

底辺の拡大という意味では成果を上げつつありますが、見る側が演ずる側にまわり、観客の動員が減少する傾向に在るのが心配です。更に大きな問題として、底辺の拡大が文化の向上につながるという課題があります。大衆化は濃度をうすめ、創作意欲にもえた人をも無くす結果になると疑問を出す団体もあります。観客の一部にも、総花的でなくもっとどうにかならないかという声もあります。実は今年の「市民芸能祭」の４日間の日程のうち、一日を創造意欲にもえた作品の発表日にしたらどうかと提案したのですが、否決されました。初心者にも大きな励みになると力説したのですが、実現出来ませんでした。本当に育成するという意欲があるのかと不安に思いました。

以前の活動は「学ぶ」充電の時代でした。今の活動は「自己表現」発電の時代へ変わりました。文化活動とはこうするものだという定義もありません。だからといって、適当に数をこなすレッスン・プロで、連絡会には発表の場所だけ確保してもらえれば、事足りる姿勢では困ります。団体・教室の代表者は、目的・意識的に自分の会員の育成を図ってもらいたい。そうすれば芸能祭で、スリッパの脱ぎ捨てや、使用した借物のあと片付けが出来ないという、初歩的なミスも無くなるでしょう。自己の利益の配分を求めるならば、利用者としての共同意識を通じて、水平的な組織づくりに直接参加してもらえるように、その「うねり」をつくりたいと念じています。

（日田文化連絡会事務局長　中津留鉄男）

豆知識

民族芸能　全国の津々浦々で民衆が自ら行なっている土地の芸能。広い意味の信仰心に基づくものが多く、古い伝統の中に集団的・習慣的に行なわれているものが多い。

舞楽　奈良時代から行なわれてきた音楽舞踊で、現在は〝雅楽〟の呼び名で行なわれている。

伎楽　野外劇形式の仮面舞踊でその起源はギリシャにあるといわれる。後に舞楽、猿楽に吸収され現在は獅子舞にそのおもかげを残している。

田楽　田植の行事の時に行なわれるお祭りの踊りで、田遊びがその起源である。したがって農民を中心とした大衆文化として発達してきたが、舞楽がおとろえてきた頃から、新興階級の武士に受け入れられ、のちにあらゆる階級、あらゆる地方に流行していった。

猿楽　内容的には田楽とあまりちがいはないが、曲芸や、ものまね、歌舞からなりたっており、滑稽な面が強い。のちに足利幕府に重く用いられた観阿弥世阿弥父

れんさい

大分県演劇のあゆみ（その5）

中沢　とおる

つみ木座結成の初演は華やかであった。夜一回公演は、満席の客で埋まり、大分合同新聞は大きく紙面をさいて岩男順氏（彫刻家）の劇評をのせた。つみ木座結成と同時に大分映画演劇協議会が発足し、観賞団体としての組織化が注目された。木村成敏、羽田野敏男、飯田正男（現大分市議）らが中心で動いた。舞台を創る創造集団と、観劇組織が同時併行で地方の演劇活動を支える推進力になろうとしたことは、全国各地に先がけた動きであったと評価している。戦後大分を訪れた中央劇団は、前進座、俳優座、新協劇団などがもっとも多く、それらの劇団は、教育会館（現大分市役所）三階の狭いステージや、体育館（荷揚町）の仮設ステージなどをつかって、大分の演劇ファンに名作舞台を観せてくれた。まさに隔世の感である。

つみ木座結成に先がけて、私は県から派遣された研修生として、当時、東京の六本木に竣工じたばかりの俳優座小劇場で、演出・演技・舞台美術など演劇全般の勉強をさせてもらった。テキストは「森は生きている」で、千田是也、青山杉作、伊藤喜朔など、新劇界の巨匠たちが懇切な指導をしてくれた。演劇指導者としての資格をもったことを認めるという文部省名入のお墨付をもらった。昭和二十年代というのは、そういう年代であった。貧しかったけど、明日に向かって生命が大きく鼓動した年代であった。東京へ出てきてプロの劇作家の仲間入りをしろという誘いもあった。つみ木座結成は私にとってそれらの総決算であった。

にもかかわらず、まず私が離れた。役員選挙の時期でもないのに要請されて県教組専従役員になった。岩津洋一郎が私事で大阪へ旅立った。つみ木座は佐藤至良が中心になって運営していくことになった。教育会館の狭いステージをつかって「赤い陣羽織」などを上演しつづけたが、時代は自立演劇衰退という大きな転換点を迎えていた。

（県民演劇制作委員長・芸振理事）

文化ニュース

10月5日～11月3日
田能村竹田展（開館5周年記念）　大分芸術会館

11月7日
豊後みゅーじかる炭焼長者臼杵石仏物語地方公演　日田市民会館

11月7日
チェコフィルハーモニー管弦楽団　佐伯文化会館

11月8日
チェコフィルハーモニー管弦楽団　大分芸術会館

11月9日
名作オペラハイライト公演　大分文化会館

11月9日～11月28日
秋季県美展　大分芸術会館

11月21日
大分県洋舞踊協会合同公演　日田市民会館

10月22日
バリ島の舞踊と音楽　大分芸術会館

11月25日～27日
第7回大分県高等学校総合文化祭　別府国際観光会館

11月28日
ジュニアーフェスティバル　大分芸術会館

11月30日
大分交響楽団演奏会　大分芸術会館

11月31日
第19回大分県児童文化祭　直入町中央公民館

大分県日本舞踊連盟

連絡先
TEL 34―5032

発行所・大分市府内町県教育庁文化課内県芸術文化振興会議事務局・印刷大分プリント社・題字野田南圃